



目次

1. <FDシンポジウム特集>
 - ・FDシンポジウム「学生の自らの思考を促すアクティブ・ラーニング」
 - ・第1部 招待講演
 - ・第2部 アクティブ・ラーニングの実践報告
 - ・第3部 アクティブ・ラーニングの実習と総括
2. FDミニシンポジウム開催報告
3. 法政大学 第9回FDシンポジウム参加報告
4. <各部局FD活動報告>
 - ・環境情報学府で実施された外部評価
 - ・留学生センター活動報告
5. 学生FDサミット参加報告
6. 学生FDスタッフの募集

FDシンポジウム「学生の自らの思考を促すアクティブ・ラーニング」

FD推進部門長 上野誠也

「教える」から「学ぶ」教育へ

大学教育に学習者主体の教育が問われている。平成20年に文部科学省中央教育審議会がまとめた「学士課程教育の構築に向けて（答申）」でもその必要性が唱えられている。教員が一方的に知識を伝達する授業から学習者が継続的に知識を獲得する授業への転換が重視されてきている。一方、社会の急激な変化にも対応できる人材が要求され、「AはBである」という命題知を持つ人間より、使うことのできる実践知・活

用知を持つ人間が社会では好まれている。本学でもYNUイニシアティブに4つの実践的「知」が掲げられ、教育方針に実践知が示されている。

これらの背景を受けて、大学の授業形態も学習者が受身となる受動型授業から学習者が積極的に動く能動型授業への変化が必要となった。平成23年度のFDシンポジウムは能動型授業の総称である「アクティブ・ラーニング」に焦点を当てることにした。学習者の能動的な学習への参加を取り入れることだけでアクティブ・ラ

ーニングと呼ぶこともあるが、大学教育で取り入れるときの注意点を意識して、「学生の自らの思考を促すアクティブ・ラーニング」とテーマを設定した。

平成 23 年 11 月 22 日（火）13：20 より、理工学部事務棟第 1 会議室を会場に 3 部構成として FD シンポジウムが開催された。溝口副学長から FD 合宿研修会の経験から、当シンポジウムへの期待の挨拶をいただき、シンポジウムが開始された。教職員のみならず、学生も参加し、参加者の意欲が感じられるシンポジウムであった。

FD シンポジウムプログラム	
第 1 部 招待講演「大学に相応しい「知」にこだわったアクティブ・ラーニング型授業とは何か」	京都大学高等教育研究開発推進センター 溝上慎一准教授
第 2 部 アクティブ・ラーニングの実践報告	教育人間科学部 有元典文教授 都市イノベーション研究院 谷和夫教授
第 3 部 アクティブ・ラーニングの実習	大学教育総合センターFD 推進部

第 1 部 招待講演「大学にふさわしい「知」にこだわった アクティブ・ラーニング型授業とは何か」

FD 推進部部門長 上野誠也

「教える」から「学ぶ」へ

京都大学高等教育研究開発推進センター准教授の溝上慎一先生は、FD 関係の著書や論文を数多く出されており、日本の FD を先頭で推進する方である。アクティブ・ラーニングに関する論文なども数多く書かれており、本シンポジウムの招待講演にふさわしい方である。以下に講演内容を要約する。

アクティブ・ラーニングは社会的必要性の下に導入が進められている。すでに十数年前の文献に「近年の大学教育改革における世界的な流れの一つに、「教えるから学ぶへ」をスローガンにした授業・カリキュラム改革がある」と書かれており、アクティブ・ラーニングの流れが全世界のかつ組織的な観点で求められている。しかし、そこで忘れてはいけないことは、大学



講演中の溝上慎一先生

は知識習得の場であるので、「知識習得の場」に加えることに「知識活用能力（基礎力）養成の場」があることが大切である。表面的な導入だけでは正しいアクティブ・ラーニングの導入とは言えないのである。

アクティブ・ラーニングとは

アクティブ・ラーニングの明確な定義は無い。一方的な知識伝達型授業ではない学習者の能動的な形態を取り込んだものというあいまいな定義がある程度である。そのために様々な授業形態があり、大きく分けたとしても、表1に示す4分類がある。簡単に導入できるレベルからカリキュラムに影響するレベルの形態まで幅広くある。しかし、いずれの形態であっても、授業内容を充実させるには、どうしても時間外学習の時間が必要となる。これは単位制度とは関係なく、学生個人が自分で考える時間を持つことが必要のためである。どの授業形態を採用しても、学生が教員の意図する方向へ向かっていけば、導入した授業形態は成功したと言える。

表1 アクティブ・ラーニングの形態

学生参加型授業 ・コメントカード、クリッカーの導入
各種の共同学習を取り入れた授業 ・共同学習、協同学習
各種の学習形態を取り入れた授業 ・課題解決学習、課題探求学習
PBLを取り入れた授業 ・Problem/Project-Based Learning

知識を基盤としたアクティブ・ラーニングを目指して

受講生人数に応じて授業形態を変更する必要があることを溝上先生の実践例の紹介を通じて紹介された。100人以上の受講生がいる大講義でもアクティブ・ラーニングは導入が可能である。教育の効果を高めるための要点は以下である。

1) 予習・復習を前提とする

授業中のディスカッションを充実させるためには予習が必要であり、自ら考える時間が必要である。

2) 授業の最後に毎回ミニレポートを課す

学んだことと考えたことを別々に書かせるレポート課題により、知識をもとに考えさせることができる。

3) ディスカッションを2回入れる

議論された内容をミニレポートとして提出すれば、内容が充実する。

4) 授業後の勉強のために文献を紹介する

さらに自ら学びたい学生のためにサポートすることが必要である。

さらに、手を動かし、頭を使う工夫を授業に取り入れることが大切である。心理学の講義において、粘土工作を取り入れて、自己を表現させた事例が紹介された。

授業づくりのポイント

アクティブ・ラーニングを授業に取り入れるとなれば、学生が活性化しなければ授業が進まない。ディスカッションをするには学生が自分の意見を述べやすい環境作りが必要となる。その授業づくりに関して、参考書には書かれていないポイントの紹介があった。

1) 教室の雰囲気作りを行う

授業開始前に教員が授業内容を板書し、教室に音楽を流すことで、徐々に授業が始まる雰囲気を作っていく例もある。

2) 学生の気分づくりを行う

日常生活の質問に答えることで本題の発言がしやすくなるウォーミングアップ(アイスブレイク)が効果的である。

3) ディスカッションの形式

お互いの顔を見る座席配置が重要である。階段教室の場合は、前列の学生を机に後ろ向きに座らせる工夫もある。

4) 課題が具体的である

学んだ知を基にした議論か自分の経験を基にした議論かが区別できるように課題を選ぶと効果的である。

5) 対象となる学生をよく知る

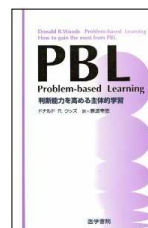
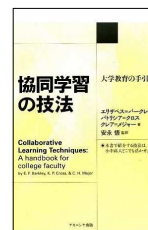
議論の結果を徹底的に予測することが重要であり、そのためには学生の学力や過去の経験を知らなければならない。学力が異なれば目標が異なり、それに合わせた課題が必要である。

アクティブ・ラーニングの評価

講演の後の質疑応答の時間に、学生の成績評価に関する質問があった。アクティブ・ラーニングはプロセスを評価することが重要であり、多重指標で評価することが必要である。また、評価ツールとして「評価ルーブリック」「学習ポートフォリオ」があると説明があった。

溝上先生お薦めの本

- ・バークレイ, E.F.、
クロス, K.P.、メ
ジャー, C.H.、協
同学習の技法—大
学教育の手引き—
(安永悟監訳)、ナ
カニシヤ出版、2009.
- ・ウッズ, D.R.、PBL
(Problem-Based-Le
arning)—判断能力
を高める主体的学
習—(新藤幸恵訳)、
医学書院、2001.



第2部 アクティブ・ラーニングの実践報告

FD 推進部部門長 上野誠也

有元典文教授（教育人間科学部）の実践報告

心理学基礎実験という授業は、心理学を学ぶ学生の登竜門的授業である。ここでは、心理学分野で世界的に共通する代表的な実験を、大学院生と学部生の混成チームで実際に実施する。具体的には、学部生 20 名と大学院生 5 名程度の受講者が、授業 1-15 回の授業の中で 3 回の実験と 1 回の独自実験に取り組み、大学院生はインストラクターとして、学部生は学習の主体として参加する。また、授業方法として、学部生が毎回レポートを提出し、再レポートや再々レポートもあるほど厳しく大学院生がチェックする。さらに成績評価は 1 回さぼっても不可になるようにしている。

最終的には、心理学の教員、博士、修士院生が参加するなかで、ミニ学会のような形で 15 分間の報告を班毎に行う。この際、優秀な発表については、研究賞、ピープルズ賞のような賞を授与す

る。
これは、より「ホンモノ」に近い実践コミュニティーへ参加する機会が、学生の学習意欲を刺激

「心理学基礎実験」 授業概要

1. ガイダンス(グループ構成)
2. 研究法としての実験/アカデミック文書の形式
3. 実験 1 解説と計画
4. 実験 1 実施
5. 心理学に関わる映画鑑賞+議論
6. 実験 2 解説と計画
7. 実験 2 実施
8. 心理学実験論文検索と紹介
9. 実験 3 解説と計画
10. 実験 3 実施
11. 最終独自実験相談、検討会
12. 予備日
13. 最終独自実験
14. 実験発表会
15. まとめ

し、学生が自然と学習するという理論に基づいた実践である。実際、学生は自然と授業外にも学習するようになり、(有元先生の)他の授業と比べても3時間以上、授業外学習の時間が多くなっている。

この際、教員として重要なのは、授業を「デザイン」することである。また、実施面では、インストラクターとしての大学院生にしっかりとレジュメの採点方法等を確認した後は、なるべく手出ししないようにすることが大事である。

アウトプットとしては、過去の学部生時に受賞者だった学生が、今度はインストラクター(院生)として関わった結果、現在の学部生を受賞させているなどの現象を生み出している。また、卒業論文への取り組みに向けて意欲が高まり、心理学領域で学ぶ学生の活性化にもつながっている。



講演中の有元教授

谷和夫教授(都市イノベーション研究院/理工学部)の実践報告

専門分野は、地盤工学(建設、応用物理、資源、環境、総合管理)で、実際に15年ほど実務をやっていた時期がある。理工学部の土木工学(33名)の授業を主に担当している。

自分としては、60名以上の講義規模の場合、アクティブ・ラーニング型の授業は無理と思っていたが、溝上先生の話聞いて、可能かもしれないと思った。

例えば、100名近い規模の授業を担当している

が、JSTが作成した地盤防災教材(次頁挿入図)を事前にPC上で学生に受けさせた後に授業を開始している。この際、授業の冒頭で学生の何を学びたいかというリクエストを聞いてから、授業を柔軟に構成するようにしている。本年度は、やはり液化化、地震、宅地の破壊などのリクエストが多かった。



講演中の谷教授

30-40人クラスの規模では、授業の中にディスカッションなどを取り入れている。例えば、写真(塀が見えていて、その向こうに家が見える)を見せて、写真では見えない部分を書くように指示する等の課題を出している。この際、判断材料(現象の特徴)、判断の結果、判断の根拠の3観点を網羅するようにレポートを書くように指示する。さらに次の週に15分間時間をとってプレゼンター、チェアマンを指定し、6名でレポートを見せ合い、話し合うようにしている。さらに6名がレポートを付き合わせながらプレゼンターがプレゼンするようにしている。

その他の例としては、花崗岩と安山岩が露出している岩盤をどちらから掘削するかという課題がある。これは、花崗岩と安山岩の特性の把握があり、内部構造と成因の推定を経て、最終的には工学的な判断をしていく必要がある。この際、リード文が非常に大事になる。

さらに3年生になると専門的になるので、地盤工学の授業では、ナビゲーションとしての解釈(地層の構成・特性)を入れながら、難易度の適

正化を試みている。

また、10-15 人の場合は、より実践的な学びとなる。例えば、現場の見学：ゼネコン技研の訪問、公開の委員会の傍聴：事前にレポート（議題の予測）を課す、課題レポート：福島の汚染土壌をどうするのか、等の問題を取り上げている。

さらに、10 人未満の場合は、地盤工学会「一次提言」の不十分なところはどこかをレポートとして課したり、野外巡検（西門から船員保険病院、上星川駅いたるエリアでの崩落箇所を探す。）したり、公開委員会の見学（耐震・津波基準検討委員会）したりするなどして活動を取り入れている。人数が少なく、高学年ほどやりやすいが、ポイン

トとしては、予習を十分させる。新鮮なネタを仕込む。問題を単純化する。適切にナビゲーションをする。という点であろう。



【参考】科学技術振興機構(JST)が提供する技術者向けeラーニングサービス。技術者の継続的能力開発や再教育の支援を目的とし、インターネット環境があれば誰でも無料で利用できる。

第3部 アクティブ・ラーニングの実習と総括

FD 推進部部門長 上野誠也

教員・職員・学生によるワークショップ

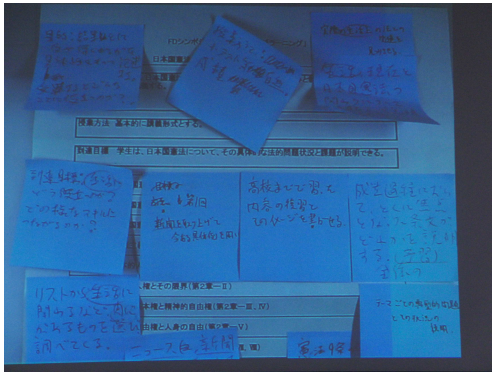
参加者の手を動かしてもらったワークショップを第3部に設定した。一方的な知識伝達型の授業概要をアクティブ・ラーニング型の授業概要に変更する作業である。課題の授業は「日本国憲法」「社会学概論」「基礎物理学」「環境の科学」であり、文系理系のそれぞれに典型的な講義のシラバスを用意した。参加者は3~5名のグループに分かれ、ワークショップがスタートした。



教員・職員・学生の混成グループでの議論

まず、自分のアイデアを絞り出す「理解の時間」。次に、それぞれの意見を紹介する「発散の時間」。そして、各人が自由に出し合った意見をまとめる「収束の時間」。最後に、15 回分の授業概要に並べる「検証の時間」。限られた時間内で一つの授業概要を作成するために、司会の合図のもとに作業を展開していった。

シンポジウムの参加者は教員だけでなく、職員も学生もいた。それぞれが自分の立場で学生の思考を促すアイデアを絞り出していた。時間が短かったために深い内容まで踏み込むことが難しかったが、議論が活発に行われたワークショップとなった。最後に、議論内容の共有のために、アイデアが書かれた付箋紙を並べたシラバスを投影して各グループの作品を紹介した。



アクティブ・ラーニング型授業のシラバス

「日本国憲法」を担当したグループからは、生活に関わるトピックスを取り入れることで、学生の思考を活性化させることをねらった。問題となる映画を見せて、ディスカッションさせるというアイデアを示した。「基礎物理学」のグループも生活に結び付けることで、使える知識を身につけさせることを考えた。講義と小テストを繰り返すだけでなく、最後には家の中にあるモノを再デザインするプロジェクトを打ち立てた。「環境の科学」のグループは、教室から外に出て行動することで、思考を動かすことを提案した。



学生が担当したグループの発表

シンポジウムへの総評

シンポジウム全体に関して、溝上先生から総評をいただいた。まず、実践報告に関しては高い評価であった。学生の学習の場として最高の条件を与えているとの感想があり、現場へ行くことが本場の教育であるとの説明を加えた。ワークショップに関しては、短時間であったために、深い議論

ができていなかった。その点を見越して、今後の検討に対して以下の注意点を挙げていただいた。

1. 学生が何を知っているかの前理解を十分に把握することが必要である。それに合わせて教育内容を変更することが重要である。
2. 日常生活と関連させる点はよいが、大学として使える「知」を教えることを忘れずにしてもらいたい。
3. 学生の中から出てこないテーマ/課題を教員が与えることになる。

今回は表面的な授業概要の作成までを行ったのであるから、さらに中身を充実させる時に有益なアドバイスとなる。形態だけを取り入れただけではアクティブ・ラーニングの本質を逃してしまう失敗への警告とも受け止められる総評であった。

参加者の声

参加者から本シンポジウムへのアンケートをいただいた。ここに一部を紹介しながら、主催者側の反省も述べたい。

今回の一番の反省点は参加者数が少なかったことである。やらされ感の無いFDを目指しているために今回は各部局へ動員を依頼しなかった。

- ・動員方法・告知方法を改める。(教員)
- ・とてもよい講演をより多くの先生方に聞いてもらいたかった。(職員)

同じように参加した学生からも意見があった。

- ・教員同士の参加が必要だと思います。(学生)
- 一方、全体で3時間半を越える長さになったために、参加者に影響しているのではという意見があった。

- ・まとまった時間が空いている先生がすくないので参加者が少ない。(教員)
- ・授業があると多くの教員が参加するのが難しいと思われる。(教員)

参加者を増やす方策を採ることが次年度の最優先課題と考えている。良かった点として、他の教員の取り組みが聞けた点が多く挙がっていた。

- ・他の先生のお話が聞けたこと。(教員)
- ・色々な取り組みの実例を知ることができた。(教員)

次に多い意見としては学生の参加が良かったと述べている方が見られた。

- ・学生がいる事によって講義をする側、される側、評価する側、される側については面白かった。(教員)

今後のシンポジウムも学生参加を認める方向で進めて行きたい。特に、本学には教員を目指す学生もおり、参考になれば幸いである。

- ・本当に参考になりました。今後活かしていきたいです。(学生)

今後の自分の教育活動にどのように展開するかという設問にはポジティブな意見をいただいた。

ただ、今回の講演で触れられた注意点も理解していただいた意見は主催者側にうれしいものであった。

- ・自分の授業で学習者の能動的な学習活動を行うことが良い部分では積極的に利用したい。ただし、この授業形態が全てではないと思われる。(教員)

- ・学習者の意欲が高まる授業をしたいです。楽しただけで終わっては無駄ですが。(学生)

FD シンポジウムを企画・運営する側にとって、今回のテーマは妥当であったと考えている。

- ・今回の様な授業に役立つものがよい(教員)
- 今後の企画もこの意見に従った方針で進めて行きたいと考えている。

FDミニシンポジウム「シラバスから教育の質保証へ —カリキュラム・マップの作成と活用—」開催報告

FD推進部部門長 上野誠也

2年目を迎えたFDミニシンポジウム

FDミニシンポジウムとは、各部局等の教授会前の時間を使って、FD推進部がワークショップを含む30分程度の講演を行う企画である。身近なFDを目標に、平成22年度から実施している。全学規模で行うFDシンポジウムと異なり、外部から講師を呼ぶことは無いが、部局に合わせた内容に変更できることや参加者の利便性を大切にしていることから、多くの参加者に対して効果的なシンポジウムが開催できている。今年度はカリキュラム・マップを作成していることに合わせて、カリキュラム・マップに掲載する到達目標の書き方をテーマに取り上げた。

テーマ選択の経緯

カリキュラム・マップの作成作業は、平成23

年8月のFD合宿研修会を経て、9月に行われたカリキュラム・マップ作成会で全学的に進められた。カリキュラム・マップはYNUイニシアティブに掲げられた4つの実践的「知」と各教員が担当する授業科目との関係を示すものであり、各教員がシラバスに記載した「到達目標」をもとに作成されている。

実践的「知」

- ✓ 知識・教養
- ✓ 思考力
- ✓ コミュニケーション力
- ✓ 倫理観・責任感

ところが、カリキュラム・マップの作成作業を進めていくと次のような問題点が生じた。

- ・到達目標とは言い難い内容やあいまいな内容が書かれている
- ・実践的「知」が意識されていない記述になっている

カリキュラム・マップを意識したシラバスの到達目標の作成を全学的に進めなければ、完全なカリキュラム・マップは完成できないと判断した。そこで、FD ミニシンポジウムを用いて、全教員へ到達目標の統一した作成方法を説明することとし、平成 23 年度の FD ミニシンポジウムのテーマを「シラバスから教育の質保証へ」と設定した。

ミニシンポジウムの開催実績

各部署に教授会開催日から FD ミニシンポジウムの開催日時を決定していただいた。

- 10月3日（月）…経営学部
- 10月5日（水）…教育人間科学部
- 11月7日（月）…経済学部
- 11月8日（火）…留学生センター
- 11月14日（月）…理工学部

いずれも 30 分の時間をいただき、FD ミニシンポジウムを開催することができた。中には、教授会の開催時間を 30 分早め、教授会の一部として扱っていただいた学部もあり、全学的な取り組みに後押しされた開催となった。

FD ミニシンポジウムの 30 分間の構成は以下に示す 3 部構成とした。

- 前半講演…15 分
- ワークショップ…10 分
- 後半講演…5 分

ワークショップを取り入れるのが FD ミニシンポジウムの特徴であり、講演を聞くだけでなく、実践に取り組んで理解してもらうことを狙っている。

推奨する到達目標の書き方

一般的な到達目標の書き方は、平成 22 年度の FD 合宿研修会で立命館大学の沖先生の講演を引用した。それに加えて、YNU イニシアティブに掲げられた実践的「知」との関係を、FD 推進部で考えた。5 つの項目で書き方をまとめた。

1. 主語は学生とし、習得する資質を「～できる。」という表現で表わす。
2. 学生が習得したことを評価できる一資質を一文で表現する。
3. 資質は習得した事が外部から判断できる行為動詞で表現する。
4. 記述した資質に関連する実践的「知」を示す。
5. 授業で重視している資質から順に書き、4 項目以内とする。

第 4 項と第 5 項がカリキュラム・マップ作成を意識した到達目標の書き方である。この 5 項目の書き方は、シラバスの改訂の際にも教員へ配られるものとした。

表 1 ワークショップでの課題

課題	実践的「知」を意識した到達目標に添削せよ
授業科目名	実践プレゼンテーション英語演習
授業の目的	勇気と自信とを持って英語をコミュニケーション・ツールとして使うことに慣れ、基礎的なプレゼンテーションができるようになることを目的とする。
到達目標（[]内は該当する実践的「知」の記号）	実践的「知」：a.知識・教養 b.思考力 c.コミュニケーション力 d.倫理観・責任感
	1.明快なプレゼンテーションができる。[] 2.英語に勇気と自信を持つことができる。[] 3.自分の考えを英語で伝えるコツを学ぶ。[]

ワークショップでの課題

ワークショップでは表 1 の課題に 2 人 1 組で議論しながら取り組むことを依頼した。設定した科目は架空の科目であるが、授業の目的は平成 23 年度秋学期から工学部で開講された科目を参考にした。複数人の講師による新規開講科目であるためシラバスがまだ無く、適材と判断した。なお、時間の関係上、到達目標を添削して、実践的「知」との関係を示す課題とした。

後半講演では、到達目標の書き方に照らし合わせて表 2 の解答例を示した。赤字部分が主な改訂点である。最初の到達目標は、文章のどこに授業担当者が重きを置くかによって、関係する実践的「知」が異なる例である。

表 2 ワークショップ解答例

- | |
|---|
| <p>1. 英語を用いて基礎的なプレゼンテーションができる。[c または b]</p> <p>2. 勇気と自信を持って英語を 話すこと ができる。[c]</p> <p>3. 自分の考えを英語で伝えるコツを 説明すること ができる。[a]</p> |
|---|

カリキュラム・マップの作成は、横浜国立大学が全学で行っている教育への取り組みである。今まで各部局で個別に行われていた教育を、全学の YNU イニシアティブに照らし合わせて質の保証を行うものである。FD 推進部としては、教育改善に繋がる活動として、今後も支援する方針である。

法政大学 第 9 回 FD シンポジウム「本当に必要な FD 活動とは—実質化のための支援・教育評価—」参加報告

FD 推進部専任教員 安野舞子

平成 23 年 10 月 8 日（土）、法政大学において「第 9 回 FD シンポジウム 本当に必要な FD 活動とは—実質化のための支援・教育評価—」が開催された。本シンポジウムでは、「本当に必要な FD 活動とは何か」を問い、提言を行うのに相応しい高等教育研究界の重鎮たちが基調講演、事例報告、およびパネルディスカッションを行った。

東北大学高等教育開発推進センターの羽田貴史教授が行った基調講演（テーマ：「大学教員の能力形成プロセスと FD の課題」）では、まず、全国的に FD が盛んに行われている一方で、実践を支える実証研究が遅れているとして、「FD 活動と教員の能力が区別されていない」、「キャリア・ステージが視野に入っていない」、「キャリア・ステージの変容（任期制の影響）」といった

日本の大学教員研究に欠落している視点が指摘された。その上で、東北大学が行った大学教員調査の結果をもとに、FD として行う各種研修内容のニーズは経験年数によって異なること、5 年以下の教員は 4 割近くが「指導助言」を期待しており、11～25 年の中堅教員は 6 割近くが「サバティカル」を求めていること等が報告された。

また、教員としての総合的能力の獲得時期（自己評価）は平均 38 歳であり、大学教員として入職後 6.4 年という結果が示された。このことから、初期キャリア者に「初任教員研修」をはじめとした FD 研修を集中させることが大切であることが指摘された。

最後に、能力獲得の要因について調査した結果（有効性認識）、学内外の FD や授業評価、教員

個人評価は「有効でない」と思っている一方、各種研究活動や学部生/院生への教育が自己の能力形成に「有効である」と思っている教員が多いことが示された。これを受けて、教員の研究支援も含めた能力開発としての「プロフェッショナル・ディベロップメント」という視点が今後重要になる、との結論が示された。

基調講演の次は、「話題提供」として次の4つの事例報告が行われた：

- 1) 「多様性と標準性、同僚性と専門性の相克を超えて～誰のための、何のためのFDか～」
山田剛史氏（愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室准教授）
- 2) 「根拠に基づく教育改善の可能性—FD再考の視点から—」
鳥居朋子氏（立命館大学 教育開発推進機構 教授）

3) 「エビデンスベースからFDを推進する：同志社大学での経験をベースに」
山田礼子氏（同志社大学 高等教育・学生研究センター長、社会学部・社会学研究科教授）

4) 「法政大学におけるFDの取組」
川上忠重氏（法政大学 教育開発支援機構FD推進センター長、理工学部教授）

以上の報告、および次のパネルディスカッションにおいては、FD実質化のための組織体制のあり方や「FDの成果」の捉え方、学生調査をはじめとした学内の様々な定量データを収集・整理し、その結果をFDと連動させて教育の質保証を目指す取組について等が語られ、効果的・実質的なFDに向けた報告、課題・問題提起が行われた。

環境情報学府で実施された外部評価

環境情報研究院 岡 泰資

環境情報研究院では、本学大学院規則第2条並びに第4条と第2中期計画に定める「各部局にあたっては、組織の必要に応じて自己点検・評価と外部評価を実施することにより、その教育研究成果を検証し高度化につなげる」に基づき実施された外部評価委員会における教育に関わる事項とその評価内容について報告する。

外部評価委員は以下の通り（敬称略）。

- 京都大学 経済研究所 教授 若杉隆平
- 株式会社東芝 研究開発センター
首席技監 久保田裕二
- 中央大学 研究開発機構
教授 辻井重男

- 毎日新聞社 水と緑地環境本部
本部長 斗ヶ沢秀俊
 - 京都大学大学院 ころの未来研究センター
教授 ベッカー カール
 - 独立行政法人 製品評価技術基盤機構
理事長 安井 至
- 外部評価は以下の手順で実施された。

- (1) 環境情報研究院企画調整会議が作成した外部評価に向けた自己点検報告書を事前に外部評価委員に送付し、事前調査を依頼する。
- (2) 外部評価委員会を開催し、環境情報研究院・学府の概要説明と教育・研究を紹介し、質疑応答と学内調査を実施する。

(3) 以上の事前調査，実地調査をもとに書面により評価結果を提出頂く。

(4) 外部評価結果を環境情報研究院企画調整会議が報告書にまとめ公表する。

評点は各評価委員に 4 段階の点数化（不適切 1-2-3-4 適切）をお願いした。

以下に評価課題（A～E）とそれに対する評価結果の概要を示す。

A) 教育に係わる基本的な組織構成が，アドミッションポリシーと理念に照らして適切であるか？

【評点 3.75】（6 名の評価委員の平均点）

- 教員の専門分野は，文系（法学，文学，人文，経済，政経）および理系（理学，農学，工学，教育，医学）と多岐にわたっており，文理融合の教育研究を行い，積極的取り組みが見られる。特に，大学院教育 GP による「医療福祉情報教育ユニット」，グローバル COE による「グローバル COE 環境リスク学国際教育プログラム」，戦略的環境リーダー育成拠点形成事業による「リスク共生型環境再生リーダー育成プログラム」など，大型プロジェクトによる副専攻プログラムやインターシップ実習等の実施，横浜市立大学・慶応義塾大学など他大学大学院，連携教員の所属機関との連携も行われていることは注目に値する。しかし，これらのプログラムも時限があるのでその後の対策や，内外の外部機関との連携をさらに強化するなどが今後の課題である。
- 修士論文研究が，単なる教員の研究サポートにならないよう，「教育」の視点からの論文研究のあり方，GP，COE，インターシップなども同様に「教育」の視点を再確認して頂きたい。
- 専攻間の有機的なつながりを活発にし，文理融合教育の特徴を更に明確にするためには，共通科目の内容についての再確認と，組織と

しての副専攻の推奨を活発にしてもよいのではないか。副専攻は主専攻と異なるディシプリンの学問をある程度体系的に勉強した上で，事例研究，ケースメソッドにより総合的止揚力を涵養させるのがよい。

- グローバル人材育成を標榜しているが，基本ツールとしての外国語教育が十分に行われているか。
- 企業経験者，海外経験者などの教員の多様性が重要であるが，教員の多様性は十分か。

B) 教育の内容と方法が，授与される学位名に照らして適切な水準にあるか？

【評点：3.80】

- 単位認定や学位授与について明確な基準が設けられており，客観的な評価がなされているだけでなく，学生表彰制度を取り入れていることは評価される
- 各専攻で行われている「独自の基準」「客観的で厳正な評価」の具体的内容が資料からわからない。「独自」であることは「客観的」を逸脱する場合も考えられることから，何を持って，各専攻の客観性が保証されているのか，見えにくい。

C) 教育の目的において意図している，学生が身につける学力，資質・能力や養成しようとする人材像等に照らして，教育の成果や効果が上がっているか？

【評価 3.42】

- 平成 21 年度の調査では，修了生の 80%が「教育理念・目的に適った教育が実施された」と肯定的な回答が，また「授業内容・方法」「成績の評価」「研究施設・設備等」についても 80%以上から肯定的な回答が得られていることから教育内容と方法が改善されている。
- 学会活動も活発に行われているが，学会での発表件数は「努力の証」であり，真に教育レ

ベルを表す指標を高水準で維持できるかが鍵となっている。

- 学生が身につけるべき学力、資質・能力が学会活動だけでは測れない部分が多く、学会活動以外の指標も検討すべきである。
- 「学者」を育てるよりは、「社会が欲しいエキスパート」を看板に掲げた方が得策ではないか。

D) 就職や進学といった修了後の進路状況に照らして、教育の成果や効果が上がっているか？

【評価 3.33】

- 博士課程前期修了者の進路状況を見る限り良好であり、教育の成果が上がっている。
- 博士課程後期修了者については、高度専門実務家として幅広い活躍の場を模索し、新たなタイプの後期課程修了者の育成に取り組むことが課題であり、このためにも副専攻や事例研究等を通じて学生の視野と興味を広げる教育システムの構築が不可欠。

E) 学生の研究に対する経済支援と教育・研究支援が適切に行われているか？

【評価 3.42】

- これまでの支援が後期課程学生を対象とするものが多いが、環境情報学府は前期課程学生の規模が大きいため、これら学生への支援がどのように行われているかについてもレビューし評価することが望まれる。
- 小規模な研究科の割には、院生への支援が充実しているように見受けられるが、「国際的に活躍できる人材」の育成よりは、「外国で活躍したい」「外国での活躍が求められる・雇用される人材」の育成を目指す方が大事ではないか。「海外でも発表できる」という院生よりは「外国で自分の腕を活かしたい」院生が大事ではないか。

以上の通り、教育に係わる各設問に対して高評価が得られたが、貴重な意見をもとに今後の教育研究のあり方に活かして行きたいと考えています。

留学生センター活動報告

留学生センター 小川誉子美

留学生センターでは、本年度、公開講座『日本語で国際交流』の開催【5～6月】、中国上海地区における日本語教育カリキュラム改革講演会での講演【9月】、ショートステイプログラムの実施【10月】、YNU日本語スピーチ大会開催【10月】、教科書開発プロジェクトと学内外との連携のもと、プロジェクトを実施いたしました。今回は、教科書プロジェクトとYNUスピーチ大会についてご報告いたします。

1. 教科書開発プロジェクト

留学生センターでは、協定校である華東師範大学日本語学部からの協力要請に応じて、2010年4月より日本語教科書の共同開発を進めています。今回の教科書は、中国では初めての、グローバルな指標に基づいて「日本語で何ができるか」というJF日本語教育スタンダードを軸に組み立てられた教科書となります。特に、協定校という強みを生かした連携の中で現地の教師・学習者の教授観・学習観を反映させています。サテライト会議【2011年3月】、上海での打合わせ【2010

年7月、12月、2011年9月】2012年10月以降は横浜での継続的な打合わせを行い、来春には、上梓の運びとなる予定です。



2011 世界日本語教育研究大会の様子

8月20日-21日にかけて、天津外国語大学において2011世界日本語教育研究大会が開催されました。この大会は1998年から年に1回ペースで開催されていますが、今回の大会は世界各国から2000人を超える参加する大規模な大会となり、現地テレビでもニュースとして大々的に報じられました。本大会において、「いかに協働して、現地に根ざした教科書を開発するか」をテーマに、華東師範大学と留学生センター日本語教育部門との共同発表（ワークショップ）を行いました。当日は1時間半の枠での発表でしたが、フロアの参加者とのディスカッションが非常に活発に展開し、この教科書の趣旨に賛同してくださる先生方、大学が着実に広がっていくという感触を持つ



ディスカッションの様子

ことができました。

2. YNU 日本語スピーチ大会

2011年10月29日（土）のホームカミングデーにおいて、留学生センター主催で「YNU スピーチ大会 2011」が開催されました。本年度のテーマは「私が見つけた日本」。本学の教職員以外にも、本学OB、市民ボランティア、近隣の一般市民、出場者の家族や友人達、約80名が留学生のスピーチに耳を傾けました。

初中級部門5名、上級部門5名が参加し、持ち時間3分、上限のパワーポイント4枚を効果的に用いて、視覚的にも聴衆を大いに楽しませてくれました。発表のあとの教員からの質問にも堂々と答えました。内容は、日本での些細な日常生活から気づいた、朝のラジオ体操、ラーメン屋の行列、毎日の通学、アルバイトを通して考えたことや、自国との比較、日本での入院や震災でのボランティア経験、震災経験で知った日本人の対応など、さまざまでした。

審査の間には、ショートプログラムで滞在している華東師範大学の5名による、この1週間の滞在中に「私が見つけた日本」について成果発表がなされました。3年生からは「お年寄りの多様な老後生活」、4年生からは「日本人の集団性について」と題し、発表があり、会場を湧かしました。その後、会場からは、この成果発表やスピーチに対する質問やコメントが多く寄せられ、審査中も終始活気あふれる様子でした。審査発表に先立ち、経営学部国際ナショナルオフィス室長アンドラディ先生による講評では、参加者への熱いねぎらいの言葉が贈られました。審査は、どのスピーチも工夫がほどこされ、非常に困難な過程でありましたが、4つの項目（内容、スピーチとしてのまとまり、日本語、質疑応答）の評価に基づいた厳正な審査の結果、最優秀賞、各部門の優秀賞、読売新聞社賞、敢闘賞の5つの賞が選ばれました。

普段、留学生と接することのないある市民の方

は「留学生が普段このようなことを思い、生活していることを初めて知った。それをこうして日本語で話しているのを見てすごいと思った。」と感想を寄せてくださいました。

来場者質問：「日本人のいい面を話してくれたが、嫌な面について教えてください」

応答1：「日本人は人が付き合うときに心を表さないことがあります。」

応答2：「察しの文化が嫌です。人の心を読んで当たり前とされると困ります。」

来場者コメント：「ふらっと来たけれど、来て良かったです。たった3分間でどうやって感動させるのか、教えて頂きたい。」

来場者コメント：「緊張している中でも堂々と自分の思いを伝えているのが素晴しかった。地震のこと、不安なこと、つらいことを含め自分のものにした上で、日本をほめちぎっていただき有難かったです。つらいこともあるけれど、日本の滞在を楽しんでください。」

以下に、来場者、及び、参加者の声をご紹介します。

「日本語スピーチ大会」が単に“日本語の成果発表”ではないことは当日参加した人が皆感じたことと思う。留学生にとっては自分の思いを伝える場であり、参加者にとっては留学生の目を通して日本を見つめなおす契機であった。教育文化ホールの中集会室をほぼ埋めた参加者、終了時間一杯までの質問、熱い感想表明がそれを雄弁に物語っていた。 (広報委員 47年経済卒業)

-病院に入院した留学生がスピーチをするというので見に来ました。近隣の留学生達が日本人のことを良く見て、細かく感じながら生活をしているということを初めて知りました。またこのようなことを感じるほど慣れない環境の中いる中で、言葉を一生懸命勉強し、自分たちの思いを伝えようとしている姿に感動し、そのたくましさにも勇気づけられました。たった1時間半だったのがもったいなく感じました。もっと大きな場所でやって、この素晴らしい機会をもっと広く知らせるといいと思いました。 (船員保険病院看護師)

本当にスピーチ大会に参加することができ、自分の功績にもなり、とても嬉しく思っています。今回のイベントは、細部に渡って完璧で、そして非常によく準備されアナウンスされていました。又、同じ思いを共有する新しい人に会い、私の視野を広げることができました。確かに、これは貴重な機会で私の世界を豊かにしてくれました。このイベントの後すぐに、次のイベントに登録したい気持ちになりました。日本の文化に自分を統合する新しい方法を探し続けることはいっそうのやる気を起こさせてくれます。【出場者】

当日の様子は、大学HPで報告しておりますので、そちらをごらんください。

<http://www.ynu.ac.jp/hus/kyomu/5489/detail.html>



学生FDサミット・2011 夏 -大学を変える、学生が変わる- 参加報告

学生FDグループ／教育学研究科 2年 中井岳志

イベント概要

平成23年8月27日(土)及び28日(日)、立命館大学衣笠キャンパスにおいて、全国各地の諸大学の教員・学生約250名以上が集い、学生FDサミット・2011 夏 -大学を変える、学生が変わる-が開催された。



会場の立命館大学敬学館校舎

学生FDサミットは、2009年から立命館大学の学生FDスタッフによって全国の大学に呼びかけて立ち上げられたイベントであり、学生が中心となり教職員とともに授業や教育についての意見交換や交流を行いながら、大学のより良いあり様について考えるものである。今回で4回目の開催となるFDサミットは、学生・教職員合わせて250名以上の参加があった。



全参加大学の30秒自己紹介
横浜国大の今野代表のスピーチ

活動報告

FDサミット初日午前では、学生FD取り組み紹介として、六つの大学が発表を行った。我々、横浜国立大学では経営学部2年森戸俊行さんから教育改善グループ(学生FDグループ)の成り立ち、組織形態・メリット/デメリット、現在の活動、横浜国立大学学生FDグループの“これから”へなどといった内容についての報告がなされた。



森戸委員による本学の取り組み紹介

午後からは「どうして大学に来ているの」という共通テーマで「しゃべり場」が開催された。学生、教職員が一体となって活発でありながらも、ざっくばらんに話し合いがなされた。



学生・教職員混成のしゃべり場

2 日目午前は、「あなたの悩み解決したるか SP」と題して、学生 FD グループの運営での苦労話や運営相談などの議論が全体で行われた。例えば、学内での知名度が上がらず、スタッフも少数しかいないので、増員するにはどのような工夫が必要だろうかといった内容であった。各大学、立ち上げてから間もないため、苦慮することも多いようである。

その後、「どんな授業がいい?」「大学で何がしたい?」「課外活動って必要?」のテーマ別に分かれてグループワークを行われた。中井自身においては、「課外活動って必要?」というテーマを扱ったグループにおいて、議論を進めながら、テーマごとにグループワークとして行き着いた結論をコンペティションとして発表し、その中で最も良かった発表グループを選出した上で、全体で再度発表が行われた。全体発表においては、当然ながら、秀逸な発表が多々見受けられ、度々、感心させられることの連続であった。



グループワークのプレゼン風景

エンディングにおいて、立命館大学学生 FD スタッフから追手門学院大学教育研究所・学生 FD へ学生 FD サミット・2012 冬が来年 2 月下旬に開催されることが橋渡しとして告知された。



大教室に集合してエンディング

まとめ

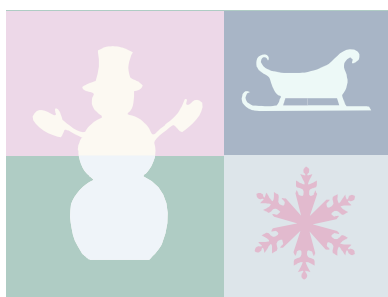
全国の各大学 FD グループが西日本の立命館大学に集結したわけだが、関西の大学生の方が大学への帰属意識が高いように思えてならない。地域性として関西の大学は郊外に分散されているため、自分が所属している大学で学生生活が完結している可能性が高いからではないかと感じている。一方、関東の大学においては、都心に一定数の大学があり、交通の利便性でもわかるように、サークル活動でも他大学に所属するといった学生の動きも見受けられる。都心の大学出身者である自身においても、学部生時代は自分が所属する大学には一切帰属意識がなかったと言っても過言ではない。文化祭で授業がなかった期間などは旅行をしていた程である。

居心地の良い大学であれば、学生も自然と自分が所属する大学に愛着が湧き、キャンパスに活気が出るのではないかと考えられる。そのためには、今後も、学生 FD グループの教育改善活動は必要不可欠になるであろうと結論づけた。

学生FDスタッフの募集

FD 推進部

昨年秋に発足した教育改善学生スタッフ（通称：学生FDスタッフ）が代替わりを迎えて、新メンバーを募集しています。お近くの教育改善に興味を持っている学生に勧めていただくようお願いします。応募や質問は、学部・学年・氏名を明記の上、ynu.fd.group@gmail.com へ送ってください。平成23年12月1日に学生FDスタッフの手で「しゃべり場」企画が開催されました。学生・職員・教員が一緒になって、授業評価アンケートの改善について議論しました。教育改善に学生の目線が必要です。ご協力をお願い申し上げます。



大学の生徒会！？

学生の目線から大学をより充実した場所にしませんか？

学生FD Faculty Development スタッフ

臨時 大募集

主な活動内容

- ・横国内FDイベントの主催・教職員との合同会議・他大学FDイベントへの参加・

ご応募・ご質問は↓↓こちらまで↓↓

ynu.fd.group@gmail.com

（送信の際は、お名前、所属学部、学年をお知らせください。）

横浜国立大学 学生FDグループ

本誌への原稿を募集しております。また、ご意見・ご感想をお寄せください。

YNU FDニュースレター No. 18

編集／横浜国立大学 大学教育総合センターFD 推進部

作成担当：ニュースレター・ワーキンググループ

事務担当：教務課大学教育係

問合せ先：kyomu.kyoiku@ynu.ac.jp

発行／平成23年12月